

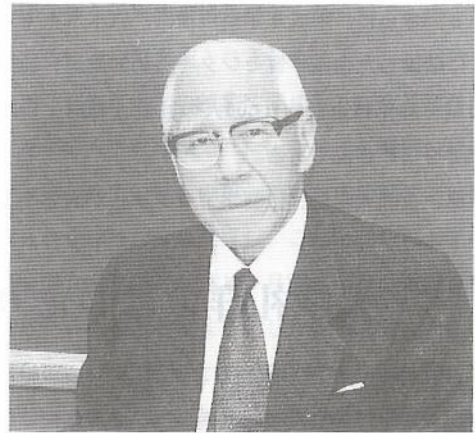
特集・東洋英和女学院大学10年の記録

開学より10年を振り返って

学長 朝倉孝吉

昭和61年春、成蹊大学長を退官した私は本学院から4年制大学開設のご相談をうけた。その時の学院の案は人文学部、人間関係学科、国際文化学科という構想であった。国際文化学科は、当時教養学部を設置基準が適用されるので学生定員の5分の1の教員が必要ですよと申しあげたら変更して下さいということで、共学志向の強い中で女子大の前途は極めて深刻であるので余程魅力あるものでなければならぬと考えた。全国女子大を調べたところ、社会科学系の学科は津田塾に国際関係学科が唯一のものでほぼ皆無といえた。

学院の意向で人文学部の変更は不可ということで、学部名はそのままとし、語学力があり国内外で活躍できる教養をもった新しい女性育成のため、政治経済、国際関係、地域研究を学際的に研究する社会科学科と、従来の人間関係学科の心理、社会、教育の専攻枠を外し、宗教を加え、グローバルに人間研究をする人間科学科の2学部をつくることとした。しかも両学科に10以上の共通科目をおき学際的教育を志向した。また準制限地域である為、入学定員200名、既存の短大の定員を50名減少することで設置認可となったが、これでは経営できないので第2次臨時定員増を活用して平成3年、4年に100名ずつ200



名の臨時定員増を行い入学定員は400名となった。ついで、主として社会人の為の共学の夜間大学院を六本木校地に開設すべく申請、平成5年4月より人間科学研究科、社会科学研究科を開設した。ついで、平成6年には両学科を学部とし、学院本部の意向により、短大を大学の短大部とすることを申請、平成7年認可。さらに平成8年に人間科学部の中に人間福祉学科を増設し、短大部の募集を停止することを申請、同9年認可。同時に生涯学習センターを設置した。平成10年秋には短大部最後の学生を送り出し、短大50年の歴史を閉じた。

臨時定員増、短大の定員を4大に吸収、さらに人間福祉学科新設で入学定員は675名と増大したが、

平成11年から臨時定員増の半分を削減、入学定員を575名とすることまで決定している。この間施設の面でも人員増大に伴い、大教室棟を含め、2つの教室棟やコンピュータールーム、食堂の増設、人間福祉学科の実習用にも使用される温水プール、トレーニングルームの完成、新図書館も平成11年夏迄には完成の予定。このように10年間に大学の定員、施設共に開学時とは比較できぬ程充実した。

一方教学面からみても、わが国の代表的な学者も集め、同時に社会人学生を重視してきたが、平成5年から開学した共学の夜間大学院は4月、10月入学を実施し定員の3倍程度の志願者を集め活況をみせている。さらに、平成9年から横浜、六本木キャンパスに開設した生涯学習センターも約50講座、前期、後期制で昨年は合計約1,000人の社会人聴講生、本学学生を集め盛況である。

学部、夜間大学院、生涯学習センターが大学を支

える3本柱となろう。

以上のように、開学10年間殆ど毎年大学生生き残りの為、諸施策を実施してきた。あと社会科学部の学部名変更と改組が残されている。

以上10年間の歩みを顧みだが、18才人口の減少から女子大の生き残りが困難になることは不可避である。

ドラッカー教授が「人類の進歩は、変革と継続の必要性の2つの矛盾する命題をいかに調和させるかにかかっている。組織内ですで行っているものをよりよく遂行する経営管理的な能力は、継続に属する。古いものを壊し、新しいものを作り出すことが変革を意味する。」といている。

現行の組織をよりよく遂行する努力と新しいものを作る変革の努力が現在の大学に強く要請されていることを謙虚に受けとめるべきである。

大学礼拝のはじまり

大学宗教主任 浜 辺 達 男

1989年、本学開学に際し入学した学生は233名でした。当時キャンパスには短期大学がすでに設置されており、開学時の礼拝は中央館の2階の集会室にあって短期大学と一緒に守っていました。少数の学生たちの有志のものが出席していました。開学時、職員の宮坂育子さんと相談して、パイプオルガン奏法を習熟するための、ドイツ製電子オルガンを、大学独自の備品として購入しました。このオルガンを利用したオルガニスト講習会が始まったのも、この年でした。開学1年目のクリスマス礼拝のプログラムが残されていますが、コーラス同好会が合唱しています。この年クリスマス讃美礼拝が月曜日から金曜日まで持たれていまして、すでに奏楽者として4

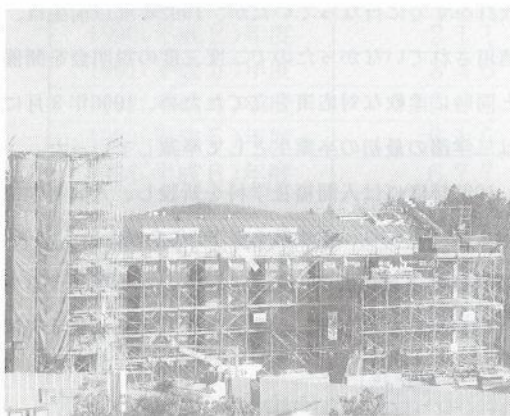
人の学生たちが奉仕してくれています。

1990年度になると毎週月曜日を大学礼拝に定め、礼拝週報を発行しています。説教者として朝倉孝吉先生、小林政吉先生、川島貞雄先生、目黒士門先生、渡辺和子先生、浜辺達男が何回かずつ担当していました。奏楽者として当時の学生課職員佐藤千奈津さんが1年を通してつとめていました。

1991年度には東洋英和女学院礼拝堂が完成していました。オルガニスト講習会に参加した学生たちによる礼拝奏楽が始まりました。3年生、2年生の中から、レギュラーとして登場する学生たちが10名もいました。新しい礼拝堂は1年間教室としても利用され、1年生は礼拝堂でのキリスト教学の授業に出

席しました。大教室棟である5号館が建設中だったからでした。この秋の「かえで祭」には、第一回オルガン演奏会が開催されていました。13名の学生たちが演奏し、指導者深井李々子先生の特別演奏もプログラムに加わっていました。

1992年度には入学生の数が倍増しました。礼拝後に奏楽者が宗教曲を演奏する企画も加わりました。コーラス部による合唱のプログラムも設けられました。小林政吉先生による「教会音楽を聴く」という特別企画もありました。キリスト者学生による「讃美と感謝」も持たれるようになりました。この年のクリスマス礼拝には、隅谷三喜男先生を説教者としてお迎えしていました。この年の学祭では第二回オルガン演奏会に8名の学生たちが演奏していました。



1993年度に礼拝堂にノアック社製のパイプオルガンが設置されました。同年11月から礼拝をパイプオルガンによる奏楽によって守ることが出来るようになり、オルガニスト講習会に参加して来た学生たちが、本物のパイプオルガンを演奏することが出来るようになったのです。この年の第三回オルガン演奏会には16名の学生が演奏を披露することが出来ました。クリスマス礼拝には東洋英和女学院高等部の河野和雄先生のオルガン演奏を聴くことが出来、また「メサイアを歌おうの会」によるヘンデル「メサ

イヤ」の中から2曲を合唱することも出来ました。礼拝堂を中心に、まことに活発な行事が行われた年となりました。第一回生の卒業を迎えた年度でもあり、「卒業記念パイプオルガン演奏会」が1994年3月15日に開催され、開学以来礼拝奏楽を担当してきた森本倫代さん、風間法子さんによる演奏がなされました。

1994年度も前年度の企画を踏襲して年間の礼拝が守られました。福田垂穂先生、平山正実先生、山本和代先生、陶山義雄先生が説教者として新たに登場しました。「かえで祭」での第四回パイプオルガン演奏会には、14名の奏楽者の名前が掲載され、指導者深井李々子先生の出番がなくなるほど、熱心な学生たちによって実施されました。

1995年度は大学の授業時間にもなう礼拝時間の変更が導入されたのでした。今まで月曜日の10時半から守られていたものが、短期大学を併せて、11時50分から12時10分に変更し、これと同時に大学礼拝が短期大学礼拝と合流し、月曜日から金曜日まで、毎日守られることになりました。今までの大学礼拝週報を、「東洋英和女学院横浜校地礼拝週報」と名称も変えました。この形式が現在用いられているものです。礼拝説教担当者に短期大学の多数の教職員も加わり、説教が豊かなものとなりました。週報第4面の宗教主任による短文章を、大学宗教主任と短大宗教主任と交替しながら、執筆するようになりました。この年の第五回パイプオルガン演奏会は、7名の学生によって実施されました。

1996年度は前年から始まった形式を踏まえて進められていました。この年には毎週金曜日の礼拝後に「聖書と讃美歌に親しむ会」が企画され1年間継続しました。この年度で永い間礼拝を支えてこられた小林政吉先生とお別れしなければなりません。そのほか、今まで短大に教えて来られていた先生で、礼拝説教を担当されていた諸先生の訣別説教のよう

なものが続きました。富岡眞先生、山北宣久先生、小崎忠雄先生、舟木てるみ先生、小川塩子先生、田中真佐子さんの名前はいつまでも憶えていたい方々、との思いを持ちました。

1997年度短期大学には2年生が在籍しているだけとなり、短大最後の年度を大学礼拝も歩みをとともにしました。福田垂穂先生、関永光彦先生、松居直先生、村上悟先生が、礼拝にあって説教のご奉仕をさ

れ去って行きました。大学でネイティブとして英語を担当され、積極的に礼拝に参加して下さったセシル・パンチ先生もこの年度でアメリカにお帰りになりました。

この10年間に及ぶ礼拝を中心とした宗教活動は、まことに恵まれた日々であったことを痛感し、今あらたに父なる神に感謝の祈りを捧げたいと思っています。

教務よりみた10年

教務課長 雨宮美和子

東洋英和女学院大学が誕生した10年前は定員200名の1学部2学科という小規模の大学であったが、10年経った現在は、定員675名の2学部3学科という中規模大学となった。これは10年という短い年月に、臨時定員増、改組転換・カリキュラム改革、短期大学の廃部、人間福祉学科新設と次々と制度上の整備を行なった賜物である。臨時定員増については1991年度、1992年度の2回続けて行ない、開学の時の200名から400名と定員が倍となったので、大幅な教室不足となり急ぎょ大教室棟(5号館)と教室棟(4号館)の2棟を建設したが、完成するまでは集会室・チャペルまでも教室として使用したのである。

人文学部の単学部でスタートしたが、人間科学科・社会科学科の2学科を人文学部という名称の学部の下におくという不自然さを解消するための検討をした結果、1995年4月に改組転換を行ない、人間科学部と社会科学部の2学部となった。人間科学部・人間科学科、社会科学部・社会科学科と名称と内容とが一致した学部になったが、この処置は入学生から順次移行ではなく、在学生全員に適用の改

組転換であったので、前年度から周知の実務を開始した。改組転換を念頭に1993年度に、カリキュラム改訂をすでに行なっていたが、1992年度以前生は、適用されていなかったので二度三度の説明会を開催と同時に柔軟な対応策を立てたため、1996年3月には二学部の最初の卒業生として卒業していった。

1997年度には人間福祉学科を新設し、人間科学部は2学科となり、学生数も2,000名を越えた。2000年度は学生数は2,900名となるが、カリキュラムも、資格課程も充実させ、女子大学としてますます発展していきたい。

専任教員数

1999.2

| 年 度 | 学 部 | 教 授 | 助教授 | 講 師 | 助 手 | 合 計 |
|--------------|-------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 1989(平成元)年度 | 人文学部 | 7 | 6 | 2 | — | 15 |
| 1990(平成2)年度 | | 18 | 11 | 8 | — | 37 |
| 1991(平成3)年度 | | 20 | 9 | 7 | — | 36 |
| 1992(平成4)年度 | | 23 | 11 | 11 | — | 45 |
| 1993(平成5)年度 | | 24 | 16 | 5 | — | 45 |
| 1994(平成6)年度 | | 25 | 17 | 4 | — | 46 |
| 1995(平成7)年度 | 人間科学部 | 14 | 10 | 2 | — | 26 |
| | 社会科学部 | 18 | 9 | 4 | — | 31 |
| 1996(平成8)年度 | 人間科学部 | 15 | 8 | 1 | — | 24 |
| | 社会科学部 | 20 | 6 | 4 | — | 30 |
| 1997(平成9)年度 | 人間科学部 | 25 | 13 | 4 | 4 | 46 |
| | 社会科学部 | 23 | 11 | 4 | 0 | 38 |
| 1998(平成10)年度 | 人間科学部 | 28 | 12 | 3 | 4 | 47 |
| | 社会科学部 | 21 | 12 | 4 | 0 | 37 |

入 学 者 数

| 年 度 | 人文学部人間科学科 | 人文学部社会科学科 | 合 計 |
|--------------|-------------------------|------------|-----|
| 1989(平成元)年度 | 92 | 141 | 233 |
| 1990(平成2)年度 | 118 | 144 | 262 |
| 1991(平成3)年度 | 132 | 201 | 333 |
| 1992(平成4)年度 | 176 | 274 | 450 |
| 1993(平成5)年度 | 182 | 274 | 456 |
| 1994(平成6)年度 | 176 | 271 | 447 |
| | 人間科学部人間科学科 | 社会科学部社会科学科 | |
| 1995(平成7)年度 | 200 | 285 | 485 |
| 1996(平成8)年度 | 253 | 222 | 475 |
| | 人間科学部 | 社会科学部社会科学科 | |
| 1997(平成9)年度 | 人間科学科 248 人間福祉学科 96 | 360 | 704 |
| 1998(平成10)年度 | 人間科学科 329 人間福祉学科 116 | 380 | 825 |

学 生 総 数

| 年 度 | 人文学部人間科学科 | 人文学部社会科学科 | 合 計 |
|--------------|--------------------------|------------|------|
| 1989(平成元)年度 | 92 | 141 | 233 |
| 1990(平成2)年度 | 211 | 284 | 495 |
| 1991(平成3)年度 | 346 | 485 | 831 |
| 1992(平成4)年度 | 521 | 759 | 1280 |
| 1993(平成5)年度 | 615 | 905 | 1520 |
| 1994(平成6)年度 | 677 | 1027 | 1704 |
| | 人間科学部人間科学科 | 社会科学部社会科学科 | |
| 1995(平成7)年度 | 748 | 1104 | 1852 |
| 1996(平成8)年度 | 825 | 1038 | 1863 |
| | 人間科学部 | 社会科学部社会科学科 | |
| 1997(平成9)年度 | 人間科学科 876 人間福祉学科 96 | 1130 | 2102 |
| 1998(平成10)年度 | 人間科学科 1024 人間福祉学科 211 | 1238 | 2473 |

卒 業 者 数

| 卒 業 年 度 | 人文学部人間科学科 | 人文学部社会科学科 | 合 計 |
|-----------------|---------------|---------------|-----|
| 1回 1992(平成4)年度 | 87 | 123 | 210 |
| 2回 1993(平成5)年度 | 109 | 142 | 251 |
| 3回 1994(平成6)年度 | 131 | 195 | 326 |
| | 人間科学部人間科学科 | 社会科学部社会科学科 | |
| 4回 1995(平成7)年度 | 9月卒業 1 172 | 9月卒業 1 272 | 446 |
| 5回 1996(平成8)年度 | 178 | 256 | 434 |
| 6回 1997(平成9)年度 | 174 | 252 | 426 |
| 7回 1998(平成10)年度 | 9月卒業 1 | 9月卒業 1 | 2 |

現図書館の歩みを振り返る

図書館長・社会科学部社会科学科教授 中村 隆 英

1999年夏には待望の新図書館が完成する。同時に現図書館はその役割を終える。そこで、現図書館の歩みを記録にとどめ、新図書館への橋渡しとしたい。

(1) 短大の移転と短大図書館の建設

現図書館は、1986年、短期大学の横浜校地への移転に伴って建設された。設計に当っては、施設全体の顔、教育のシンボルとして存在感をもつことが目標とされた。確かに、アプローチ、外観、吹き抜けと天窗をもつ内部の構造など、多くの工夫がこらされ、快適な空間となっている。また、開架方式を基本とする配架、共同研究室の設置など、利用しやすいように配慮されている。しかし、収容能力7万冊では、移転前の蔵書数5万5千冊、年間増2千冊からすると、数年後には増築が必要になることは明らかであったうえ、国際教養科の新設等による蔵書の増加に対応しなければならなかった。

(2) 短大時代の図書館運営

利用者サービスとしては、六本木時代に引き続き、新入生へのオリエンテーション、「図書館だより」や「新着図書だより」の発行、館内展示、「講義のための必読文献リスト」の作成とその書物の特別コーナーへの配架を行ってきた。

運営体制としては、移転の年に図書館業務にパソコンが導入され、翌年からは目録もパソコンで作成されるようになっていく。当時は女性司書ばかりの4人で図書館業務を行っていたが、六本木からの図書の移転作業等もあり、かなり多忙であったと思われる。

(3) 大学の新設と図書館の増設

1989年に大学が新設されて、蔵書・閲覧スペースの拡大が急がれ、88年8月から89年3月にかけて図書館東側に増築工事が行われ、同時に本館1階も一部改築された。その結果、床面積が617㎡増え、収容能力は15万5千冊に増加したが、早くも89年度末には蔵書数が10万冊を超えたので、新図書館の建設が急務となった。なお、この時の増・改築工事に併せて冷房設備が設置され、床に絨毯が敷かれたことで、ようやく読書環境が整備されたのである。

91年には増築部分の3階に電動書架が設置され、新聞縮刷版や製本済み雑誌が配架された。

(4) 大学・短大時代の図書館の運営

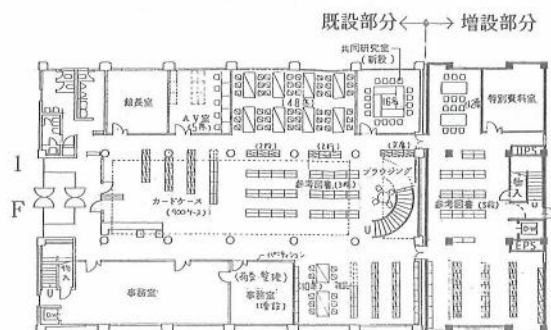
89年度にかなりの制度改革が行われた。図書館規定、合同図書委員会規定、利用規定が制定されたほか、図書館機構が整備され、副館長と図書課長が置かれた。司書も前年の1人に続き2人が増員された。

運営体制の充実とともに、サービス面では貸出し事務の電算化、ブックディテクションの設置、AVルームの改修、相談係員の常置、国立国会図書館貸出制度への加入などがなされた。95年度には国内の大学とオンラインで結ばれ、相互協力体制が整った。

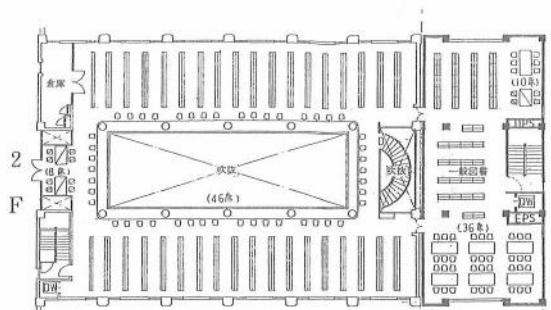
利用者教育としては93年度から、希望があれば文献検索の仕方など卒論を意識した指導をゼミ単位で行っている。98年度からは後期に1年生全員を対象に英語のクラス単位毎に、目録検索端末やCD-ROMの利用のしかたなどを指導している。

施設面での問題を抱えながらも、利用者サービスは着実に向上してきている。新図書館における一層の飛躍を期待したい。

図書館増・改築工事計画図

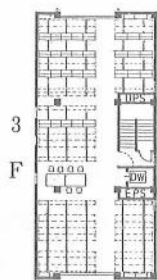


開設当時の図書館内部



パソコンも導入された99年2月現在の図書館内部

新築・増改築とも設計・監理
三菱地所株式会社一級建築
士事務所
新築工事
施工 鹿島建設株式会社
竣工 1986年3月
増・改築工事
施工 清水建設株式会社
竣工 1989年3月
電動書架設置 1991年8月



既設部分
床面積合計 1,381㎡
(418坪)
増築部分
床面積合計 617㎡
(187坪)
床面積合計 1,998㎡
(605坪)

蔵書冊数と利用状況の推移 (大学開設以降)

| 年度 | 1989 | 1990 | 1991 | 1992 | 1993 | 1994 | 1995 | 1996 | 1997 |
|--------------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|---------|
| 蔵書冊数 | 104,315 | 108,743 | 114,106 | 119,001 | 123,546 | 125,397 | 134,419 | 142,701 | 152,969 |
| 雑誌の種類 | 547 | 594 | 598 | 601 | 589 | 596 | 612 | 702 | 767 |
| 学生貸出冊数 | 12,310 | 14,694 | 17,414 | 19,150 | 22,498 | 23,400 | 22,807 | 21,762 | 22,458 |
| 学生1人あたりの貸出冊数 | 9.81 | 9.74 | 9.10 | 8.13 | 8.92 | 8.85 | 8.38 | 8.40 | 9.07 |
| 全国私大生平均貸出冊数* | 4.65 | 4.76 | 5.15 | 5.45 | 5.89 | 6.20 | 6.83 | 7.07 | 未発表 |
| 図書館間相互協力 | | | | | | | | | |
| 複写受付件数 | 3 | 7 | 10 | 15 | 23 | 27 | 52 | 205 | 347 |
| 複写依頼件数 | 26 | 65 | 17 | 34 | 43 | 105 | 174 | 171 | 304 |
| 紹介状発行数 | 17 | 10 | 14 | 33 | 26 | 107 | 94 | 131 | 58 |
| 入館者数 | 42,502 | 49,965 | 57,165 | 57,742 | 62,816 | 63,279 | 61,182 | 60,440 | 62,253 |
| 学生数 | 1,255 | 1,508 | 1,913 | 2,356 | 2,523 | 2,645 | 2,722 | 2,590 | 2,476 |

図書館長

1986-1989 原島 正
1990-1991 和田 廣
1992-1993 大嶋恭二
1994-現在 中村隆英

副図書館長

1998-1990 川島貞雄
1991-1993 増田 弘
1994-1995 岡田洋子
1996- 副館長職廃止

図書課長

1989-1995 清水末寿

図書館事務長

1996-現在 佐々木 肇

*出典『図書館年鑑1998』p.282-283

新設 アクア・エクササイズ・センターについて

—— その目的と構造上の特徴 ——

人間科学部人間福祉学科教授 宮 下 充 正

1998年11月、大学構内に多目的運動施設であるアクア・エクササイズ・センター（略称 アクア・センター）が完成した。これは水泳・水中運動施設であるが、トレーニング・ルームも併設している。以下にその目的と、それに合わせた設計上の工夫や配慮を紹介しよう。

【目的1】運動を習慣化する場を提供する

運動の習慣を身につけるためには多様な運動施設が身近に必要である。大学の既存の運動施設にアクア・センターが加わることで、理想的な環境が整備されたことになる。特に学生には、「健康科学概論」で学ぶ理論と実践を一致させることが、時間に追われる教職員には、運動の実践を日常化することが可能になった。生涯学習センターでは成人女性のためのフィットネス講座を開設している。

【目的2】障害者の運動指導実習の場を学生たちに提供する

温水プールでは、重力負荷から解放されることで、高齢や傷害で筋力の衰えた人、下肢に障害のある人、過体重の人でも、からだを動かすことが可能となる。そのような人たちが利用しやすいように、入り口からプールサイドまでのアプローチは、段差をなくし、幅を広くし、手すりを付けた。また、プール内へは車イスのまま入水できる特別のコースが設けてある。さらに、両側に手すりのある幅2m、水深1mの歩行用の、滑らないタイル張りの2コースと、幅2m、水深1.2mの水泳用の3コースを並行して配置した。

しかし、からだにやや障害のある人には、更衣してプールへ入るまで、そして、プール内でのからだの動かし方など、それぞれの個人に対して適切な介助と指導が必要であって、人間福祉学を専攻する学

生が実習するよき対象となる。大学周辺に居住するからだにやや障害のある方に利用してもらい、実習への協力を依頼したいと考えている。

学生はこのような経験を通して、障害を有するさまざまな「個人」と「からだ」への理解を深めることができよう。

【目的3】こころの健康保持の場を提供する

運動実践が“こころ”の状態を良好に保つ上で有効であることは、多くの調査・研究が明らかにしている。これには運動する環境が良好でなければならないが、わが国のこれまでの学校運動施設には、この点での配慮が欠けていた。本学のアクア・センターでは、室内の色調、空調、照明、音響、窓からの眺望などに、できる限りの工夫をこらした。また、湿りがちなプール周辺を床暖房で乾いた状態を保つ、プールサイドの広い温浴槽で心身共にリラックスできるように配慮をした。

昨今の学生の、悩まされやすい“こころ”を健康に保つのに役立つ場になるものと信じている。

【目的4】競技レベルの向上を目指す学生たちにトレーニングの場を提供する

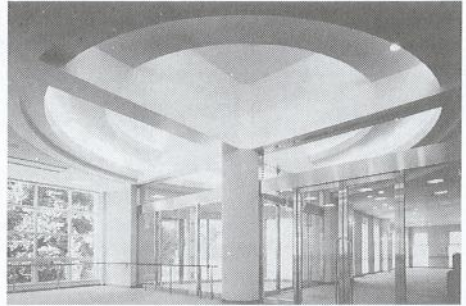
競泳に限らず他の競技種目でも、水泳・水中運動は持久力の向上に、また、傷害からのリハビリテーションに有効である。そして、各種マシンを設置してあるトレーニング・ルームでは、筋肉が発揮できるパワーの増大に不可欠なレジスタンス・トレーニングができる。

当施設は、テニスコートとゴルフ練習場に隣り合う、緑豊かな場所にある。学生や教職員をはじめ地域の人たちに積極的に利用してもらって、上記の目的が達成されることを願っている。

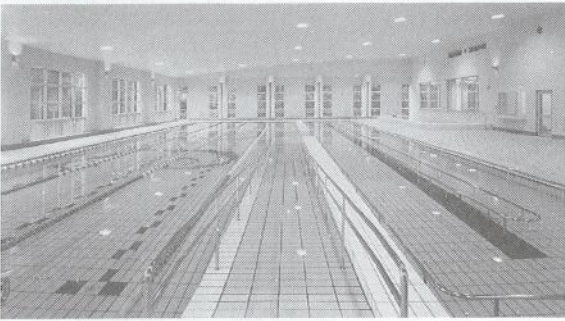
Aqua-Exercise Center



アクア・エクササイズ・センター外観

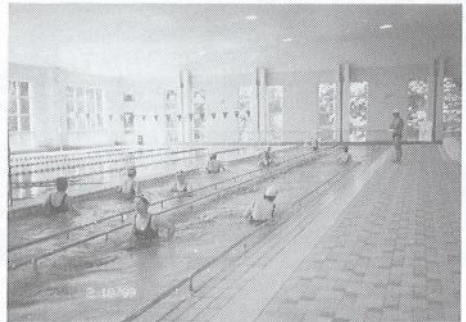


エントランス (シリンダー天井見上げ)



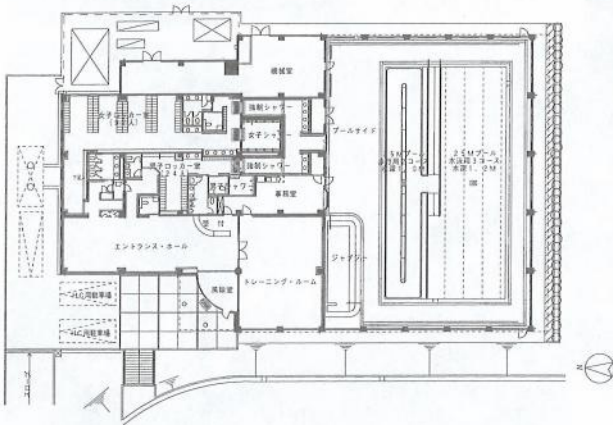
プール内部全景

スロープを中央に水泳用3コース、歩行用2コース
プールサイド右奥に長さ9mのジャグジー



水中ウォーキング

(生涯学習センター・フィットネス講座)



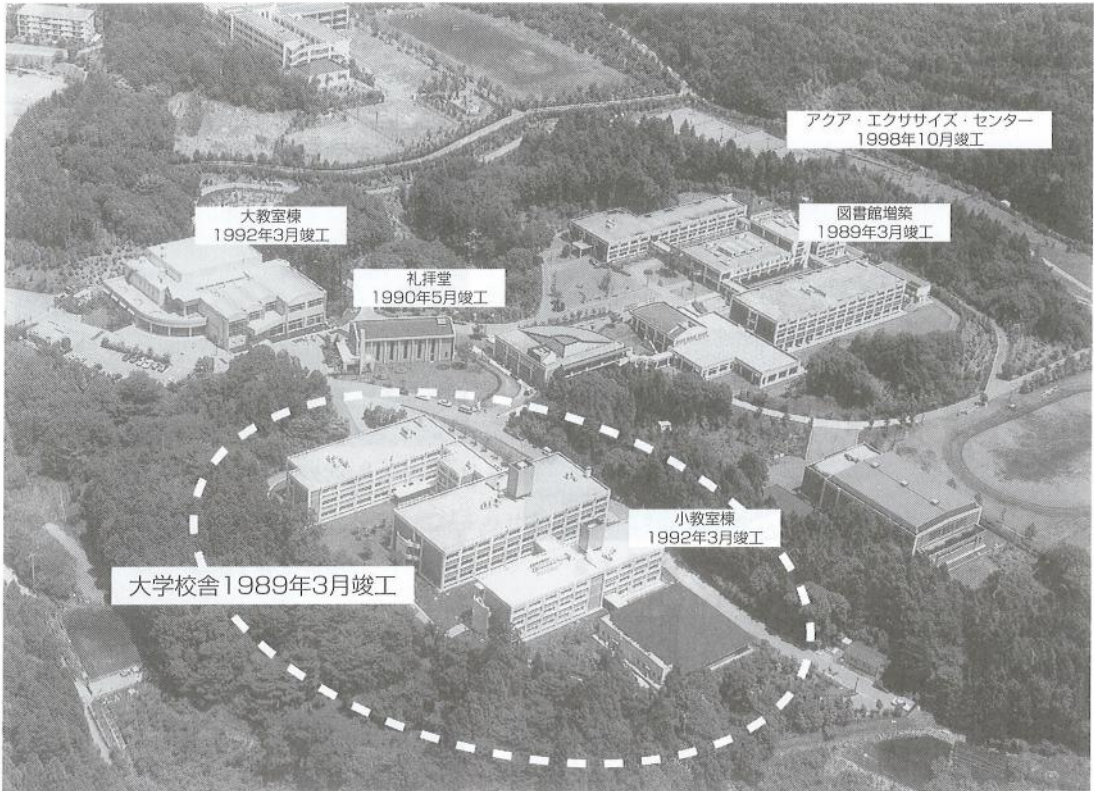
アクア・エクササイズ・センター 平面図



トレーニングルーム

建築概要

| | |
|------|-----------------------|
| 工事名称 | 東洋英和女学院大学温水プール棟新築工事 |
| 工期 | 1998年3月1日～1998年10月30日 |
| 設計監理 | 三菱地所株式会社一級建築士事務所 |
| 施工 | 清水建設株式会社横浜支店 |
| 敷地面積 | 164,686.53㎡ |
| 建築面積 | 1,464.33㎡ |
| 延床面積 | 1,423.51㎡ |



大学キャンパスの変化 1989年～



第2回 卒業式

あとがき

10年ひと区切りと云われる通り、大学も創設期から成長・発展期を懸命に走りつつ、大きな転換期を迎えています。21世紀を生きるに相応しい大学となるよう、歩んできた歴史をまとめて特集を著わしました。(大学 川崎末美・陶山義雄)

